かながわ感動介護大賞

～ありがとうを届けたい～

受賞作品

平成24年11月11日

かながわ感動介護大賞実行委員会

目　　次

○第１回かながわ感動介護大賞　応募作品の総評　……1

○受賞作品

最優秀賞　「食を忘れてしまった母の脳を目覚めさせる介助法」　……2

優秀賞　「ヘルパーの長谷川さん」　……4

「救いの言葉」　……6

「介護員のやさしい言動で、私は生きていく力が湧いた。」　……8

「心のこもった介護」　……10

「良い介護で寿命は伸びる！」　……12

特別賞　「あの世とは（散文）」　……14

▽第1回かながわ感動介護大賞　応募作品の総評△

第1回かながわ感動介護大賞には68 件の応募があり、介護サービスを利用しているご本人からも24 件の応募がありました。

応募作品から読み取れる介護が必要となった原因は、変形性膝関節症や脳血管障害、癌など様々でした。病気や加齢等に伴う介護問題はいつ起こるかわからない、まさに、国民全体の老後の不安であることが確認できました。

介護が必要となった状況にたいして、家族や本人が混乱や苦悩を感じることは当たり前の感情です。しかし、多くの作品から、時間の経過とともに病気や障害等を受け入れ、介護することの意味や介護者への感謝の気持ちが率直に伝わってくることが理解できました。

ひとつひとつの作品から、介護の意味や介護にかかわる関係者の笑顔を想像していただければ幸いです。

かながわ感動介護大賞表彰選考会座長　峯尾　武巳

最優秀賞　「食を忘れてしまった母の脳を目覚めさせる介助法」　今野　マサ江　様

感動介護を行った事業所　社会福祉法人　偕恵園　特別養護老人ホーム　椿寿

　ある家族会の日に施設長がおっしゃった言葉「椿寿の入居者様は皆私達の家族です。」職員の方も笑顔で頷いていました。現在九十七歳の母が入居して七年、その間四度の危機がありました。食事も水分も摂れなくなりました。その時の職員の介助を見てとても驚きました。

　まず、口を開ける様、頭を撫で、両手で肩を抱き、俯いている顔をそっと覗き名前を呼ぶ。

「僕の顔を見てごらん。少しだけお昼ご飯食べようか。ゆっくりで良いよ。」

顔を上げる母に

「顔を見てくれて有難う。美味しそうだね。口を開けてくれる？」

少し口を開けた母に、ほんの少しだけ口に入れる。

「もぐもぐして。ゆっくりで良いよ。上手だね。」

と繰り返す。やっと飲み込んだ母に、肩を抱き額と額を合わせて

「食べてくれて有難う。」

後ろで見ていた私の身体は硬直し、娘の私が何もできないことを恥ずかしく思い涙をこらえていました。

最近も発熱し、食事が摂れなくなりました。体にとても良いと言われているお猪口いっぱいの小豆あんこ

を出していただいたり、四苦八苦しながら、母が自力で食べれたときは、職員さんの喜ぶ声が廊下中に響き渡りました。
きっとこのような介助で幾度も母が元気になったことを思い返しました。
「十分でも一時間でも一日でも長生きしていただくことが私達の仕事であり願いなのです。」
という施設長からの言葉をいただき、年老いた私達家族も元気に、明日を明るく楽しく頑張れるのです。
「母さん頑張れ頑張れ。」
心から、感謝、感謝、有難うございます。

▽講評△

高齢のために嚥下機能が衰えていく現実と、難しい食事介助のエピソードから、介護職員による介護の手順や動作、気遣いまでもが伝わってくる作品でした。
人生の最後の時期を、価値ある日々として送れるよう支援することも介護の使命です。
そして、施設長を中心に介護の目的に向かって努力する介護職員の思いを、母親への介護をとおして感じ取った、家族の方の率直な感動と感謝の思いが伝わってきました。

優秀賞　「ヘルパーの長谷川さん」

飯嶋　秋子　様

感動介護を行った職員　医療法人社団　景翠会　けいすいケアセンター　文庫西口

長谷川　郁枝　さん（介護職員）

主人は二十年前脳梗塞を患い他の病気も色々出て認知症も入り、内科リハビリ等病院通いをしていました。六年前も心筋梗塞と肺炎になり胃ろうをすることになりました。

その頃よりデイサービス、ショートステイ、週二回のヘルパー、週一回の訪問看護師さんに手伝ってもらい、生活を維持していました。その内の一日（金曜日）午後四時二十分より五時十九分迄デイサービスの帰る時間に合わせて来てもらい着替、トイレ、お三時を食べさせてベッドに寝かせて私の帰りを待っていてくれた長谷川さんと云うヘルパーさんがいて主人はとても頼りにしていて、デイサービスの朝は何度も長谷川さんが来るか聞いて出て行きました。

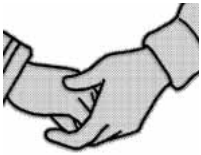
三月十一日（金）東日本大震災の当日、私は出先よりすぐに帰りましたが家まで車で二十分位の所ですが途中携帯も通じず、停電で信号機も動かず、知っている限りの裏道を探して二時間半もかかり家に辿り着きました。

介護五の主人がどうしているか気掛かりでしたがどうしようもなくなんとかベッドで寝ていてくれればと祈りながら家に入ると真っ暗な中にヘルパーの長谷川さんが主人を「一人にして帰れなかった」と云っ

て側にいてくださった。

私はホットして有難く涙が出ました。主人も安心していた様子でした。やさしいヘルパーさんのお陰で二十年間の介護でしたが今月九月八日八十二才で亡くなりました。

今に思えば長い介護大変なこともありましたができるだけ前向きに楽しく過ごす様に心掛けました。



▽講評△

応募者の中で、唯一東日本大震災時のヘルパーさんの緊急対応が記載された作品です。緊急時の見守りの範囲も話題になりましたが、要介護５の病人が不安の中で、ヘルパーさんと無事に待っていてくれたことの安堵感はまさに感動だったこと、日ごろの信頼関係―命綱のような存在のヘルパーさんという点を評価いたしました。

ヘルパーさんと事業所と信頼もまた厚いと見たのです。

優秀賞　「救いの言葉」

金子　育世　様

感動介護を行った職員　有限会社　メロウクラブ　居宅介護支援

野村　誠子　さん（ケアマネジャー）

「金子さんはよく頑張っている。だから、自分を責めないで。」

「介護する人が笑顔でいることが大切。」

父の介護に行き詰まり、暗い顔の私をケアマネジャーの野村さんは、絶えず励まし続けてくれた。

野村さんと出会った頃は、仕事をしながら母の入院の世話、要介護四の父の自宅介護と、心身ともに疲労は極限に達していた。介護の甲斐あって寝たきりの父の病状が少しずつ良くなっていった反面、認知症は進んでいった。仕事から疲れて帰宅しても、父の介護が待っていた。

ある時は、部屋中に異臭が充満して、その中で、おしめを外し、片手に自分の便を持ち、途方に暮れている父がいたり、またある時は、自分の小便だまりの中で幼子のようにびちゃびちゃと足踏みしていたりと、毎日、びっくりすることが起こった。

その度に疲れた体をひきずって後片付けするのだが、父も一緒になって片付けてくれようとして、かえってきれいにした所をまた汚していく。思わず、「静かに座っていて。」と声を荒げてしまう。そんな自分に対する嫌悪感。父も父なりに頑張っているのがわかるだけに辛かった。

世間では、介護の美談ばかりが報じられる中、日々の介護に悩み、疲れ、自分をダメ人間だと責めている私を、野村さんの言葉は、癒し勇気づけてくれた。

私が、介護から逃げずに頑張ってこれたのは、野村さんの言葉があったからだと思っている。

▽講評△

仕事をしながら介護をつづける中で、疲れた体をひきずって頑張っても、厳しい言葉を父にぶつけてしまうという状況はどんなにか辛いことでしょう。

しかし、一緒に片付けてくれる父を父なりに頑張っていると感じるご家族のやさしさを、野村さんはしっかり捉えているのでしょう。

ご家族の力を引きだし後押しするケアマネジャーの大切な役割がよく表れている作品だと思います。

優秀賞　「介護員のやさしい言動で、私は生きていく力が湧いた。」　黒澤　満江　様

感動介護を行った職員　社会福祉法人　輝星会　ケアハウス星　石川　政子　さん（介護職員）

夫婦でケアハウスへ入所して、三年半すぎました。無口な夫と社交苦手な私は、当初不安だらけでした。最近、ようやく外出から戻ると、我家へ帰って来たのだなあと実感できるようになりました。

入所した年の暮、夫は認知症と診断され翌年、ケアマネさんの進めで週二回デイサービスへ通うようになりました。

ハウスの最古参者職員の石川様は柔軟な心の持主です。苦情・心配事等、どんな話にも耳を傾けてくださいます。

年間行事の一つである、お盆の迎え火、送り火、そして季節感溢れる茹栗、茗荷のミジン切りを希望者のお椀に差し入れる等気配り名人です。

また、聴力の落ちた私のために、多忙をさいて電話増幅器の機種や、売場を探してくださる、こうした事柄は、入所者全員へ公平に対応しておられること、やぶさかでないと思います。

ある日のできごとです。九十歳すぎた、つゆ子さんが自動販売機の前へ、腰を落としており、男女二人の職員さんが懸命に起こそうと頑張っておられました。その時、偶然石川様が階段を上ってこられ、この現状を素早く察知し、つゆ子さんの背後から両手を廻されると、あっというまに抱き起こされたのです。

私は思わず「すごい！どこにそんな力が…」と口走りました。
石川様は「これが私の仕事ですから…」とさり気なく、おっしゃり事務室へ入られました。

私達には家族はなく、よる年波で体に不具合が生じ、買物や調理に事欠く有様になりました。主人は膀胱癌、私は頚椎背髄変形で病院と縁が切れません。主人の認知症は大変な病気だ、介護する人の態度で悪化する等々が耳に入り、私の病気と重なって、八方塞がり心中を考えました。退所も考え、ケアマネ様や石川様へ、大変、迷惑をおかけしました。

今はすっかり悲しみも薄れ、今が一番と思い直し、毎日、病気はあるが、心迄病気にならないよう努力・修行中の身です。ある本に「強くなければ生きられない。優しさがなければ人間の資格なし」と。残る人生を楽しむために運を天にまかせていく決心でおります。

▽講評△

介護職として大変な日々の業務を、さらりとこなしている様子がとても新鮮に映り、またそんな気持ちを、利用者としてくみ取って下さった文章表現が評価に値すると思います。

「これが私の仕事ですから」という言葉が自然に出てくることに、評価者一同新鮮みを覚えました。介護職としてのプロ意識を感じさせる一編として、評価したいと思います。

優秀賞　「心のこもった介護」

関　慶久　様

感動介護を行った事業所　社会福祉法人　道志会　（特別養護老人ホーム）

母が綾瀬市の施設に、お世話になったのは要介護三で足腰が衰え車椅子の使用を始めた頃だが、それまでは病気知らずで、すこぶる元気だった。

しかし、急性肺炎で入院し、危篤に陥り医学的には回復の見込みがないと言われて退院を促された。戦前戦後の混乱期をさんざんに辛酸をなめながら歩んできた人生は、このまま黄泉の世界への旅立ちかと思うと哀れで涙が止まらなかった。

「特養は患者の受入れは難しい」とのことで、介護療養型医療施設を捜したが何処も満床でした。在宅介護は環境面が不安で途方に暮れた。施設では、私達家族の心情を察して、開園以来はじめての看取り介護を採用していただくことになり「藁をも掴む」の気持ちで縋ることにした。

介護士、看護師、栄養士、相談員、医師らによる多職種協働体制によって、日夜きめ細やかで手厚い介護が四カ月も続けられた。嚥下力が衰え栄養補給がままならず、枯れ枝の如くやせ細った手足になってしまったが、奇跡的にも、三カ月目には大好きな「ぜんざい」を欲しがり、口に入れてやると、満面の笑顔で「ああおいしい」と感嘆の言葉が返ってきた。その笑顔は一歳四ヶ月になる双子の孫と重なり感動した。

医療から見放された母は温かい介護の手に支えられて、穏やかな日々を過ごし四年後。紫雲に乗り九十

七歳で西方浄土へ旅立った。

顧みて介護に携わった皆さん！心から感謝します。施設の原動力である介護職員は皆明るく仕事への取り組みもマジメで好感がもてます。

▽講評△

元気だった親の老いや病を目の当たりにし、子としては現実を受け容れ難いものです。ご家族は将来の道標を失い、失望されたことと思います。ご家族の思いを受け止め、看取り介護を初めて行うことは、施設の勇気ある決断である一方、不安も大きかった筈です。「ぜんざい」を口にした満面の笑顔、感嘆の言葉がご家族と同様に、施設職員にとっても、介護の可能性を引き出し自信や励みにつながり、大きな感動となったことでしょう。

優秀賞　「良い介護で寿命は伸びる?!」

山口　容子　様

感動介護を行った職員　有限会社　ダーム　ダームメディカルケアサービス　つきみ野

日暮　学　さん（介護職員）

ヘルパーさんは職人さんだ。介護福祉士の日暮さんの介護をする姿を初めてみたとき、私はそう思った。オムツ交換をする姿、父を車椅子に移乗する姿、どれをとっても美しい。そして何よりも安心感がある。職人の姿だ。

六十歳でくも膜下出血で倒れ、十ヶ月間意識が出ず「植物状態も否めない」そう医者から言われた。その父も現在七十五歳だ。奇跡的に父の意識が戻り三年の入院生活ののち在宅生活を始めてから今年で十二年目を迎える。左上下肢麻痺、右下肢麻痺の後遺症が残った。要介護五。オムツ使用全介助。言語障害も残り、発語がわずか。そんな父がずっと口から食事をつづけ、無理だと言われていたが優秀なヘルパーさん達のおかげで食事摂取し、ここまで来れた。

食事介助というのは、誰もができるわけじゃない。誤嚥をしないよう注意深い観察が必要だ。十二年前病院では口からは食事は無理と言われ胃ろうをすすめられた。ダメ元で在宅に戻った。技術のある介護福祉士のヘルパーさんに出会ったおかげで、口からの摂取に成功した。

医師である私も、父の介護をするヘルパーさん達に出会って介護力がいかに大切か学ばせても

らった。

「良い介護で寿命はのびる！」

心のこもった介護、きめ細やかな介護、そして極めた介護（日暮さんは初代男性介護福祉士介護職歴二十二年）のおかげで今も父は健在だ！

父を支え続けてきた日暮さんを筆頭にヘルパーさん達に「ありがとう」と伝えたい。

▽講評△

医師という専門職の方が医療では無理だと言われた在宅での介護について、献身的な介護福祉士の実践を評価してくれた気持ちが大いに表わされていると思います。

また、女性が多い介護職の中で、男性介護職として長きにわたって実践を積まれていることについての敬意の気持ちが、文章から感じられました。

特別賞　「あの世とは（散文）」

宍戸　美津子　様

感動介護を行った職員　社会福祉法人　照陽会　特別養護老人ホーム　みんなと暮らす町

小林　新吾　さん（介護職員）

特養に入居して5年弱、とある眠れない夜。夜勤の小林さんとのやり取りを以下の散文にしたためました。

「あの世とは」　ししど　みつこ

いつもやさしい職員の小林さん

夜勤の時「小林さん　あの世とは
どんな所でしょうか」と私がききました

小林さんの返事
「あの世に行った人
この世に一人も
帰ってこないのは

とても楽しい
ところでしょう」と
私そう思えばそうなんだと思ったら
急におかしくなって笑いがとまりません
床についてもあの
小林さんの洒脱な言葉に
感心しながらねむりました
洒脱とはさっぱりしていること

▽講評△

この作品は、多数の応募作品の中で審査員を驚かせる異色のものでした。少ない言葉ながら、状況をありありと思い浮かべることができ、読み終わった人それぞれに余韻を残すすばらしい作品だと思います。

あの世とは?という問いかけへの見事な答えは、その夜の眠りを快適なものにすっかり変えてしまう力をもっており、介護の難しさそしてすばらしさを一瞬にして語ってくれている気がします。

かながわ感動介護大賞表彰選考会委員名簿　（○…座長）

東海大学　准教授	東　奈美
特定非営利活動法人 神奈川県介護支援専門員協会　副理事長	石田　貢一
田園調布学園大学　准教授	遠藤　慶子
社団法人　神奈川県社会福祉士会 福祉サービス第三者評価事業運営委員会　副委員長	髙島さち子
神奈川県介護福祉士養成校連絡協議会　会長	豊田　宗裕
神奈川県立保健福祉大学　教授	○峯尾　武巳